

だい きやまとしたぶんかきょうせいかいぎ だい かいがいぎろく ようやく
第3期大和市多文化共生会議 第1回会議録(要約)

にちじ ねん がつこのか ど
日時: 2013年2月9日(土) 14:00~16:20
ばしょ やまとし やくしよぶんちようしゃ かい だい かいぎしつ
場所: 大和市役所分庁舎3階 第2会議室
しゅっせき いいん あらいまさのり いしま いたうひろこ いたうともみ いなぶく
出席: 委員(新井政則、石間フオルデリサ、伊藤裕子、伊藤素美、稲福スー
ザン、岡崎チャメイン、小林ホルヘ、紺野勝、ファンチイフォン、
宮嶋耕治、山田静娥) / ファシリテーター(清水睦美) / 大和市
こくさい だんじよきょうどうさんかくか ふなこしえいいち はら だかずのり こうえきざいだんほうじんやまとし
国際・男女共同参画課(船越英一、原田和徳) / 公益財団法人大和市
こくさい かきょうかい おぎ そあきら そとやませいいち くまがいかおる たなかひろこ こにしえりこ
国際化協会(小木曾明、外山誠一、熊谷薫、田中弘子、小西永里子、
いしかわかずとも いじょう めい けいしやうりやく
石川和友) 以上20名(敬称略)

いしよくじょうこうふ
1 委嘱状交付

こうえきざいだんほうじんやまとしこくさいかきょうかいりじちよう かくいいん いしよくじょう こうふ
公益財団法人大和市国際化協会理事長から各委員に委嘱状を交付した。

やまとし こくさいか げんじよう
2 大和市の国際化のあゆみと現状

やまとしこくさい だんじよきょうどうさんかくか やまとし こくさいか かん せつめい おこな
大和市国際・男女共同参画課から大和市の国際化に関する説明を行った。

やまとしたぶんかきょうせいかいぎ がいよう
3 大和市多文化共生会議の概要

こうえきざいだんほうじんやまとしこくさいかきょうかい ほんかいぎ がいよう せつめい
公益財団法人大和市国際化協会から本会議の概要を説明した。

じこしょうかい
4 自己紹介

いいん にほん しな い ろうじんかいご つうしよしせつ しごと かいご しごと ねん
委員(日本): 市内で老人介護の通所施設で仕事をしている。介護の仕事は6年
め目であるが、いぜんが いしけい とうなん かいしゃ しごと おんがえ
以前は外資系(東南アジア)の会社で仕事をしていた。恩返し
をしたいと思います。

いいん こくさいかきょうかい つうやく ほんやく ほか し
委員(フィリピン): 国際化協会の通訳・翻訳ボランティアをしている他、市
ない びやういん つうやく しな い どうほう でんわ と あ
内の病院で通訳をしている。市内の同胞からの電話での問い合わせなどを受
けている。

いいん にほん ことし さい やまとし きょういん のち ねんかん く
委員(日本): 今年で70歳。大和市の教員をした後、2年間はフランスで暮ら
した。その後、みなみりんかん なんみん ていじゅうそくしん
その後、南林間にあったインドシナ難民のための定住促進センター
で働いた。定住センターが閉所されたあとは、とうきよう なんみん しぎょうほんぶ
はたら ていじゅう へいしよ とうきよう なんみん しぎょうほんぶ
東京の難民事業本部で、
インドシナ難民担当として、暮らしのガイドや医療用語集などを作っていた。
げんざい かながわけん
現在は、あーすネット(神奈川県のあるフェスタというフェスティバル
きかくいいん つく たぶんかきょうせい だんたい かんじ ほか
の企画委員が作っている多文化共生のための団体)の幹事。その他、カン

ボジアの NPO を立ち上げるなど、カンボジア・ラオス・ベトナムの方のサポートをしている。お年寄りに優しい地域は、外国人にも優しい地域になるのではないかと思う。後ろから見守る形で参加していきたい。

委員(日本): 大和市との協働事業でもある「つるま読み書きの部屋」とボランティアの日本語教室で日本語教師をしている。より多くの外国の方の困っていることや問題を知りたい。

委員(ペルー): 長く市内に住んでいて、国際化協会の通訳翻訳ボランティアをしている。その他、同胞からの相談にも乗っている。

委員(フィリピン): 国際化協会の通訳翻訳ボランティアの他、大和市の外国語指導助手(ALT: Assistant Language Teacher)として市内の小中学校で働いている。小中学校で、外国人の子どもとも関わりがある。外国人の子どもたちが暮らしやすい地域づくりのために何かできればと思う。

委員(ペルー): 大和市に引っ越してきて3年。市内の NPO で小中学生に数学を教えている。

委員(ベトナム): 高校の教員補助として外国人生徒の学習を支援している。難民として定住促進センターに入ったときから大和市に住んでいるので、何かできればと思い応募した。

委員(ベトナム): 2007年に留学生として来日し、日本に住んで6年目になる。日本の生活を勉強しながら、国際化協会に通訳・翻訳のボランティアをしている。

委員(日本): 退職して数年になるが、現役時代は自動車会社で38年間海外の事業に携わってきた。15年間で4カ国に駐在した。子ども二人は海外で生まれ、インターナショナルスクールや現地校など現地で教育を受けさせてきた。大和市に何か貢献できないかと思っている時に広報で今回の委員募集の記事を見つけた。海外の人たちにお世話になってきたので、恩返しをしたい。

委員(韓国): 日本に来て20年。結婚と共に大和市にきた。結婚する前はあまり感じなかったが、結婚、子育てを通して日本人と外国人の違いを感じた。お互いが持っている偏見を解消したい。お互いをもう少し理解し合って、大和市に外国人が多く住んでいることがメリットになるようなことをしたい。

ファシリテーター: 大和と関わるようになったのは1997年からで、当時は大学院生として教育に関わる研究をしていた。当時の指導教官から日本で外国人の子どもとして生まれてくるとどのような問題を抱えることになるのかといった問題提起があり、自分も研究することになった。いちよう団地にたく

さんの外国人が住んでいて、その子どもたちの小学校へ行って彼らがどんなことを言ったり、先生や友だちとどんな関係を築いたりするのか、まさにフィールドワークをしながら観察してきた。それ以来、今までずっと関わりを持っていて、当時小学校4年生だった子どもは現在、25~26歳になった。「すたんどばいみー」という外国人の子どもたちが立ち上げた団体にもずっと関わっている。

今回、自分に依頼があった理由は2つあると考えている。1つは、自分がフィールドワークをしていること。例えば、大和市は税金を集めて、その税金を使って、市民のためにやらなければいけないことを考え、実行する役割を持っている。ただ、どうしても市役所で考えるネットワークから外れてしまう人が出てくる。フィールドワークは、そうした人たちを現場から見えていく、下から探していくみたいなものと言える。

もう1つは東日本大震災のこと。個人的にはどうしても学校で育つ子どものことが念頭にあり、震災で学校がなくなってしまった子どもは一体どのよう学校と関わっていくのか、気になって仕方がなかった。そこで3.11後、月曜から金曜までは仕事をし、金曜の夜から土曜、日曜にかけて夏までは毎週末東北に通った。必要な物資を持って行く、不必要なものを持って帰るなどの支援を行った。それはこちらで生活していれば知らないこと。現地に行くことで、いるものといらないものがあることを身をもって知ることになった。岩手県では大和市ほどたくさんの外国人が住んでいるわけではなかったが、中国やフィリピン出身で国際結婚した人と接する機会があった。夫や義母がいるから大丈夫、と言っていたが、一旦家族と仲が悪くなってしまうと子どもと共に孤立してしまうという状況があった。

第1期、第2期多文化共生会議の提言を読んでも、第2期の後半部分に防災に関する提言がある。よくできているが、この提言ができたのは震災前で、実際に提言にある取り組みが実行されているかわからない。災害は、私たちにとって知らないこと、突発的に起こること。米軍の飛行機が墜落するかもわからない。先ほど話した市役所で考えるネットワークの下側にいる人が災害時に生きのびていけるのかという問題がある。防災は単に危険を避けることだけでなく、その中で子どもの問題などいろいろな課題も出てくる。フィールドワークを通じて皆さんの声を聞きながらこの提言が具体的な形になるようにしていければと思う。

5 その他

3.11 日本大震災の地震が起きたとき、どこにいて、どんな行動を取ったのか、委員それぞれが発言した。

委員(日本): 3月11日の地震のときは有料老人ホームの施設長をしていた。本部から入居者全員をフリースペースの1箇所に集合させて安全確認をし、揺れが収まるまで部屋には戻さないという指示が出た。誰もけが人が出なかったが、その後夕食の時間までのことは記憶にないくらいバタバタしていた。

委員(韓国): 日本に来て20年経つが、これだけ揺れる地震を経験したのは初めて。子どもと一緒に保育園や学校で防災訓練を受けたことがあるが、防災ずきんをかぶるなど正直なところ面倒だと思っていた。日本の社会でやっていくには仕方ないと何となく訓練を受けていたが、ああいう大きな地震はその訓練の記憶を思い出させた。玄関のドアを開ける、お風呂に水を入れるなどを実行した。防災訓練がなぜ必要なのか、20年日本に住んでようやく分かった。

委員(日本): 大和市に60年住んでいる。かつては南林間で洪水が発生するなどしたことがあったが、3.11のときは家が崩れるのかと思って怖かった。それから、米軍のジェット機が墜落したこともあった。暴風雨、飛行機の墜落、地震など、どれも突発的で、いつやってくるか分からない。

委員(ペルー): 子どもはまだ小学校にいる最中で、自分は仕事が終わって自宅に帰ってきたところで地震があった。家具が壊れないか、心配だった。身の回りのものをバッグに入れて外に出て、近くの人と自宅のある9階から階段で下りた。学校へ子どもを迎えに行き、友人らと情報交換した。自国のペルーでも地震はあるので、自分の親から地震のときは落ち着いて、と言われていた。

委員(フィリピン): その日は小学校の国際教室の料理会があり、ちょうど食べ始めるときに地震があった。子どもたちは普段の避難訓練の成果が出て、スムーズに避難できたが、外のグラウンドで泣いている子もいた。家に帰り、ペットは無事なのか心配だった。家族にはfacebookで無事を伝えた。電話はダメだったが、ネットはつながったので、すごく助かった。

委員(韓国): 海外にいる家族に何を言ってもダメだった。戻ってこいとよく言われた。

委員(ペルー): その日は運転免許証をとるために二俣川の免許センターにいた。地震が起きた後は建物の外に出て、落ち着くまで待った。二俣川の駅に

戻ったが、電車が動かず、1時間半かけて自宅まで歩いた。バス、タクシーもなく、電話も通じなかったので徒歩で帰るという判断をした。

委員(ペルー): 普段、大和市の防災無線はよく聞こえないが、あの日はよく聞こえた。しゃべり方がよかったから、耳を傾けるようになったかもしれない。

委員(ベトナム): 防災無線は話す人によって聞きやすい、聞きにくいがある。私の場合、地震があった日は自宅付近にいて、すぐに自宅に戻り、何もなかった。定住センターで訓練を受けたので、それが役立ち、地震が起きても落ち着いて行動できる。

委員(ベトナム): その日はお休みを取って一人で自宅にいた。怖くて、日本の学校で教わったようにテーブルの下に隠れた。日本人の友人に電話してもつながらず、テレビを見てもっと怖くなった。隣のおばあさんから大丈夫と声をかけられて少し安心し、家に戻った。夫とは連絡がとれず、帰宅したのは夜中だった。いまだに怖いので、今は地震に備えて準備している。

委員(ペルー): 日本人が不思議なのは、あれだけ揺れたのに誰も外に出なかったこと。

委員(韓国): 私の近所の方は、みんな外に出ていた。ああいった危機のときは知らない人とも話すようになる。誰かと話すことで安心感を得られる。一人でいると恐怖感が増す。

委員(フィリピン): 自治会の防災訓練に何度も参加したことがあるので、災害のことは理解していた。でも、実際地震が起きて、やっぱり怖かった。自宅にいた子どもや近所の人と話して安心したが、夜になっても夫と子どもが帰宅できなくて不安になった。あの地震以来、家族の間で話をして、自宅にいないときは近くの小学校に避難することを決めた。

委員(日本): 私は買い物をしていて、建物の5階にいた。お店の人が安全を確認しながら誘導してくれた。しかし、電車が動いておらず、タクシーもなく帰る手段に困った。私はどうやって自宅まで帰っていいのか分からず、近くにいた人に声をかけて、徒歩で2時間半かけて帰宅した。

委員(日本): 私は外で草むしりをしていて大丈夫だったが、娘たちが苦労したようだ。一人はビルの30階にいるところ、もう一人は高架橋の下を歩いているところで揺れて、たいへん怖い思いをしたようだった。家族がそろったのは次の日だったが、地震から1時間ぐらいの間にそれぞれ連絡はついたので安心はしていた。今回の地震では放射能も怖かった。イタリアの友人が

ほうしゃのう じょうほう たいし かん
ら放射能の情報が大使館からかなり入っていることを聞いていたが、正しい
じょうほう ふあん
情報がないと不安になる。まして放射能は目に見えない。

6 へいかい
閉会

じ む きょく じ かい かい ぎ に つ て い が つ に ち つ た へいかい
事務局から次回会議の日程（3月9日14:00）を伝え、閉会した。